

本人はなか／＼聞入れませんので、止むなく女の身許を調べて見ますと、素より卑しき者でなく、世の變遷の爲に藝妓に成つて稼いで居りますもので、此の扱ひは至つて親孝行で行儀作法も正しく、極溫柔女だと云ふ事ですから、大丸屋の方でも、そんな女なら機會を見て宅へ入れやうと云ふ事に成りました。夫れとは知らぬ惣三郎は我が思ひの叶はぬと云ふ處から、自暴を起して狂氣同様の舉動を致します。夫れが爲に、先づ當分は三條の木屋町をば上りました處の川添への小ぢんまりとした、座敷借を致しまして、番頭の忠八を附添へて出養生を致して居ります。時候は七月の事で御座居ました。惣三郎は椽側の葦簀を開けひろげ、東山をば眺めて居りました。處へ番頭の忠八が山海の珍味をば廣蓋にのせて、「若旦那定めし今日は御退屈で御座りませう、サア一ツ召飲りなされませ」オ、忠八が氣が注かれたな一ツ注いでお呉れ「へエ、お酌致しましよ」ア、「チョツ」(呑ム)サア一ツいこう「ヤア、これは何うも恐れ入ります、オツトツト、有ります」時に番頭私にお前に何時ぞは聞ふと思ふて居たが、彼の方向に見へる寺は何と云ふ寺や「此時隣で三昧を弾く京の四季春は花……」へエ、あの寺で御座りますかあれは檀野の法蓮寺と申しまして、正面に掛つて有ります額は有名な額で御座ります、あれは有栖川親王様の御眞筆で御座ります、此方にありますのは、龍燈の松と申してこれは往昔安永の頃、鴨川大洪水の砌加茂の明神様がこれへ流れて参りました、京都洛中洛外までも大いに立騒ぎました。其際龍神此松に現はれ出て燈火を點じ、京都洛中の人をば、此の燈火の爲に扶けたと云ふ事で、現今に於ても晦日の夜には、彼の松樹に燈火を點じます。是れが所謂龍燈怪訝の松、此方の松はあれが星野勘左工門逸れ矢の松と申します。昔彼の處をお繩手と云ふて皆土手で御座いしま

た只今では人家に成つて居ますが、こゝで和田雷八と星野勘左工門の兩人弓術の競いをいたし勘左工門の、逸矢が彼の松の樹に刺さつて、近頃まであつたと申します「フム、向ふの方に白い壁が見えるは何んや」あれは大日山で彼の下に弓屋に、弦屋と云ふ二軒の茶屋が御座ります、松茸狩りには皆この處へ出かけます「此の通りに見へるのは」あれは永觀堂黒谷眞如堂、これには熊谷蓮正坊と、敦盛公の墓が御座ります「向ふの方に禿た山は何と云ふのや」「あれは吉田山、下にあるのが聖護院の宮」その最一ツ向ふの高い山は「あれは大文字山……へエあれは上加茂、下加茂」其の北手は「そなにお尋ねなさんと私が、のぞき屋の口上言ひみたようでござります」しかし忠八、隣り座敷はしんねこで宜い聲やなア、あの歌は京の四季、私しあの唄好きや、お時が舞妓の時代に舞ふたがよかつたで、あら何處の藝妓やうなア「サア先斗町だすやろか、サモなければ、向ひ側(鴨川東)の藝妓はんだつしやろオ」あれを、さかなに一ぱい注いで呉れ……これ何で顔をシカメて居るのや、エ、どこぞ悪いか「イエどこも悪い事はござりませんが、てうすがしたいのでござります」「これは恐れ入つた……マアしておいで、そないに、こらへて居るのわ、却つて毒や」夫れでは、チョツトやつていたゞきます」番頭さんは用をたしに参りました、惣三郎は隣りの三昧線の音を聞くにつけ、フト、お時さんの處へ行きたいなア、と思ひましたる處から、床に置いてある、村正の刀を、腰に帯び表へ出やうと致しましたが、氣もそわ／＼致して居りましたので、履物に、けつまづき、ガタリツと、云ふ音に忠八が飛び出して來ました「オヤ、若旦那、あなたは何處へお出でなされます」チョツト、その邊まで「チョツトその邊までや、ござりまへん、行くなら行くと私しに、一遍こたへてお出で遊ばせ、イ